

「自立活動における主体的な学習を目指す取り組み」

宮城県立視覚支援学校

教諭 鈴木 いつみ

教諭 阿部 真由美

1 はじめに

自立活動とは「個々の児童生徒が自立を目指し、障害に基づく種々の困難を主体的に改善克服するために必要な知識、技能、態度及び習慣を養い、もって心身の調和的発達の基盤を培う」とされている。

本校では自立活動の指導計画を作成し、自立活動の時間や他の学習場面において指導を行っている。計画に沿って指導を進める一方で、実際の生活や学習の場面で直面した課題や本人の気持ちに応じて、指導を展開していくことも重要であると考え。ここでは、本人と教員の会話から展開した自立活動において、本人の見え方について教員が理論的に説明をしたり、本人の見え方や感じたこと分かったことを言語化させたりして学習を整理することで、主体的な学びにつながった事例について考察する。

2 仮説

- ・本人の課題となることをタイムリーに取り上げること、より主体的な学びを進めることができ、生活のさまざまな場面に結びつけることができるのではないかと。
- ・見え方などを教師が理論的に説明し、生活のイメージを持たせたり、生徒自身に言語化させたりすることで、本人が自分の眼の使い方や補助具の使い方について整理し、それを学習や生活に生かしていくことができるようになるのではないかと。

3 実践の概要

(1) 生徒の実態

ア 対象

中学部2年 女子

イ 眼疾患

眼疾：両ぶどう膜炎、両帯状角膜変性、右白内障

視力：右 0.02 左 0.03 最大視認力 0.06/3cm（右眼）

視野が狭く、中心暗点があり下方部がなんとか見える。小学3年時に視力の低下が見られた。本生徒は、左眼で色の区別をし、右眼で文字を読んでいると話しているが、教師の行動観察では、生活上では主に右眼を使っている様子が見られる。

ウ 学習の様子

墨字で学習を行っている。学習意欲があり、興味・関心を持って学習活動に取り組んでいる。全体を把握することが困難なため、多くの情報の中から必要な情報を見付けることが難しく時間がかかるが、学習内容の理解力が高い。意欲的に目標を立て、達成しようとする姿勢を持っており、常に学習課題を的確にとらえ、追求しようとしている。

中学部から本校に入学してきた。それまで自宅近くの学区内の小学校に在籍し、小学

6年からは月1回のペースで本校に来校し、点字を学んできている。今後、さらに視力低下が進行した場合でも対応できるよう、墨字・点字併用で学習している。現在は、拡大読書器を巧みに扱い、教科書はUDブラウザを使用して、白黒反転にするなど自分の読みやすいように設定し、有効的に活用している。板書はせず、学習プリント（現在、MSゴシック12P）を使用している。

エ 生活の様子

食物アレルギーが多く、学校で提供される給食に関しては安心して食しているが、校外学習での食事やお店で購入するお菓子などには、とても慎重である。食べたことのないお菓子や新発売のお菓子に興味関心はあるものの、今まで食したことのあるお菓子以外は購入したことがない。

コミュニケーションにおいては、挨拶や言葉遣いなど適切に使うことができ、先輩方に可愛がられている。一方で、相手の言葉遣いなどに神経を使い、気疲れしてしまう傾向がある。持ち物の管理では、プリントをファイルにとじ込むのに時間が掛かっていたが、今では効率よく自分の持ち物を整理することができるようになった。

(2) 指導期間

令和6年11月～令和7年6月

(3) 指導の経過

（以後、中1時担任：A、自立活動委員：B、中2時担任：C、点字指導担当：D、寄宿舎指導員：E、視能訓練士：COと表記）

ア 指導のきっかけ（R6、10月）

文化祭の準備中に、本生徒とA、Bで学習や生活における困り感についての話題が出た。Bは本生徒が視力低下後、墨字の読みが難しくなったと聞いていたことから、読むことを中心に具体的に質問をしながら話を進めた。ここで出てきた困り感は以下の通りだった。

- ・24Pのプリントを拡大読書器で読んでいるが、枚数が多くなり試験などが大変。
- ・買い物のときに、アレルギー成分を確認することが難しい。

拡大読書器で読むことについては、プリントの文字を小さくすることで、プリントの枚数が減る、行替えも減るというメリットと、小さい文字を大きくすると拡大読書器を少し動かただけで、画面の文字が大きく動くので操作が難しくなることを説明した。また、視野に入る文字数が多い方が、読み速度が上がることを詳しく説明した。拡大読書器の文字数と紙の枚数については、意味を理解し、試してみたいという思いになったようだ。

アレルギーの確認については、買い物時などでiPhoneが使えないときには、ルーペが使えたと便利なことを説明し、その場で10倍（ライト付）を使わせてみた。本人からは「見えない」との答えがあったため、見えないと思われる理由を簡単に伝えると共に他の補助具についても後日確認してみることにした。

12月に本生徒、A、B、COとで拡大読書器、ルーペと単眼鏡の使い方について自立活動の時間に確認、指導することとした。

イ 文字サイズの確認（R6 11月）

拡大読書器で読む時の文字サイズを 12P にして読んだところ、スムーズに読むことができた。その後、各教科で文字サイズを確認し、主に 12P であるが、それぞれの教科にあわせて文字のサイズを変更した。

本生徒は小学校の時の拡大教科書の文字（26P）が大きかったことなどから、拡大読書器で読める文字は 22P でそれ以上小さいと読みにくいと思っていた。実際に読んでみると、12P でもスムーズに読めることが分かって驚き、プリントの枚数が減ったことを実感し大変喜んでいた。

ウ 見え方と補助具の確認と整理、歩行について（R6 12月）

拡大読書器とルーペ、単眼鏡について、本生徒、A、B、CO で実際に使用しながら確認を行った。

拡大読書器（トパーズ）はゴシック体 12P、22P 共に縦書き横書きを5倍の拡大、明朝体 12P 縦書きを8倍の拡大でスムーズに読むことができた。

ルーペ、単眼鏡についてはどの倍率を使ってもうまく見ることができなかった。倍率が低いと拡大率が低くて見えない、倍率が高いとレンズが小さくなるため、中心暗点の場合には見ることが難しいこと、そのため現時点でルーペや単眼鏡を使うことは有効ではないことを伝えた。また、アレルギー成分の確認については違う方法を探すこととした。

本生徒は後日「拡大読書器の使い方についてきちんと評価されたことで自信がついた、補助具を持っているのに使わないことが気になっていたので、今の見え方では使うことが難しいと分かってすっきりした。」と話した。

この時、本生徒から「歩いているとき周囲は見えている」との発言があり、改めて自分の見え方について説明をさせると、「色は左眼、文字は右眼で見ている、中心は見えないが周りは見える。今の場所（教室）では天井の電気、机のプリント、左右も見える。」と視野は広いというような説明だった。本生徒は、中学に入ってから左眼で色を意識するようになっており、広範囲で見えているとのことだが、歩行の時に左眼（色）は十分に活用できていないと思われた。そこで、歩行時に左眼（色）を活用することを促したいと考えた。中心暗点で周囲が見えていても、はっきりと見えていないことが多いので、ぼんやり見えた物で、特に色が何か確認をすると、お店を探したり、歩行のランドマークとして使ったりすることができる。教師と一緒に歩いているときに周囲を見て、見えた物が何か聞いたり近づいて確認してみたりするよう伝えた。

授業後、周囲が見えること、色が分かることについて、A、B、CO、養護教諭で視力・視野検査の結果を見ながら確認をした。そこでは、見える範囲がかなり狭いが、両眼下方外側が見えていることから、天井の電気は光なので認識しやすいこと、電気や机は既に存在を認識しているため「見える」と話した可能性が高いと確認した。

拡大読書器で見る文字が 22P の時と 12P の時で倍率が同じ（12 ポイントの方が小さい文字）については、小さい文字のため拡大読書器での文字も小さいという本人の思い込みがあったと思われるが、小さい文字で十分に読めているので、このことについては現時点では本人には伝えず、機会を見てさらに小さい文字を読む様子を観察することとした。

エ 歩行1（12～3月）

自立活動の時間や寄宿舍の生活時間に、周囲にある物を確認するための歩行と帰省のための歩行指導を仙台駅や学校周辺で行った。

止まっているとき、歩いているときに本人が見えた物を言葉にしてもらい、それが何かを説明したり、近づいて見て確認をしたりする学習を行った。今まで歩行時（特に移動時）に左眼（色）を使うことを意識していなかったが、意図的に見る機会が増えるにつれて、色への気付きが増え、歩行時にもお店を見付けるなど色を捉えて活用することができるようになった。

仙台駅では見える物が何かの確認だけでなく、どんなお店があるのか調べながら、歩くことを楽しめるようになった。それに伴い、歩行技術（白杖の使い方、人混みの歩き方、視覚聴覚の活用）も格段に向上した。

また、点字指導担当 D が拗音や特殊音の学習のために、学校周辺にあるお店などの名前やルートを書いた物を読ませたことで、本人も行ってみたくなり、自立活動の時間を活用して実際に行って確認するなど、歩行の楽しさに結びついている。

仙台駅のイベントの情報に対して「友達と一緒にいきたい」との発言も出てくるようになり、友達と一緒に興味のあるイベントに行っている。友人関係にも波及し、歩行に対する意欲や好奇心がさらに出てきた。

オ 歩行2（2月～6月）

家で移動するときに壁にぶつかることがあると本人からの訴えがあり、寄宿舍指導員 E（歩行訓練士を含む）と家の間取りを書いてぶつかる場所をまとめてみたり、部屋が明るいとき、暗いときの見え方を体験させたりしてその違いを説明させた。自分の見える物を探し、自宅の壁に蓄光テープをつけて歩いてみたところ、視覚を使いながら壁を避けることができるようになった。環境認知や安全な移動への意識が高まり、安全に移動する手段として視覚を積極的に活用する様子が見られるようになった。

寄宿舍の自由時間には、散歩へ行くなど外出することへの意欲や外への興味関心が高まり、楽しんでいる。また、夜間歩行についても、暗い部屋で宝探しゲームをしたり、外の駐車場を歩いてみたり、暗いところでも歩ける経験をすることで、「暗くて怖い」→「何があるのか」→「挑戦してみたい」→「楽しい」と気持ちに変化してきている。

カ 自己理解を深め、自分について伝える（R7年3月）

朝の学級活動では、毎日心と体の状態を10点満点で数値化して伝えることで、自分と向き合い、心身の状態を俯瞰的に見ることを習慣にしてきた。新年を迎え、冬休み明けの1月下旬頃から、心の状態の数値が低くなり、本人からは「なんだか分からないけれど、心がもやもやしている」と話した。自立活動を活用して、自分の気持ちにじっくり向き合う時間を設け、自己理解を深めるいいタイミングだと考えた。

1年前はまだ小学生だったことが不思議に感じるくらい、中学部での学校生活が充実していることに気付いたようだ。心身ともに大変で苦労することが多かった小学校時代を思い出しながら、小学校と中学部（本校）を比較し、自分でパソコンを使ってパワポにまとめ、小学校からお世話になっていた相談センターの先生方や現在お世話になっている中学部の先生方の前で発表をした。（そのときの発表の発表資料は最終ページに添付）

キ 色の活用（R7年4月）

本生徒の「色が分かる」の「分かる」を、生活（近見）の中で活用できる実感を持ってほしいと考え、文具店にはいろいろな素材や色のファイルやペン等があり、実際に見たり書いたりすることで、自分にとって有効に使える物を知ることができると思い、文具店に行くことを提案した。自立活動の時間に文具店へ行き、楽しみながら、いろいろなファイルがあること、自分にとって見分けられる色が何かを知ることができた。その後の生活でも、自分の見やすい色が何か、分かりにくい色が何かを把握し、教室などの掲示物に使う色画用紙の色を選んだり、色の組み合わせを楽しんだりする様子が見られた。

ク 見え方の説明について（R7 4月）

担任がCに代わり、自分の見え方や必要な支援について説明をしたり、Cの質問に答えたりする機会ができた。本生徒は、自分の見え方や支援について、自分なりの言葉で説明をする一方で、「なんとなく」「何故か分からない」と発言することもあった。不明な点を自分なりに考えたり、CやCOに説明をしてもらったりして、自分について再度整理する機会となった。

見え方だけでなく、これまで学習したり探検したりした仙台駅のお店についてもどこに何があるのか説明し、Cを案内することもできた。

ケ 将来に向けて（R7 5月）

将来の進学やその後の自立を考え、自分は何ができ、何が難しいのか、自分にとって必要な力は何なのかをCと考える機会を持った。歩行については、周囲の環境について自分一人では確認できないが、誰かと確認できれば、その後は一人でも歩くことができることが分かり、その経験から将来の生活をイメージ出来るようになってきた。今後の指導として、歩くために必要な情報、生活するために必要な情報などを整理し、その入手や確認の仕方などを見付けるための指導をしていきたい。

アレルギー成分の確認については、「決まったお菓子」から「いろいろ買えるようになりたい」と気持ちの変化が見られ、援助依頼など自分なりの方法を探っている。

4 結果と考察

本生徒は、文字を読むことや生活の困り感について教師と話をすることをきっかけとして、文字サイズや補助具、見え方や歩行について整理することで、「見たい」「確認したい」「歩きたい」という気持ちが強くなり、より主体的に学習に取り組むことができた。また、学習したことを家庭や舎の生活に結びつけたり、将来のことについても具体的にイメージしたりすることができるようになった。

本事例は、「主体的・対話的で深い学び」の観点からも位置付けられる。特に自分の見え方を理解し、適切な補助具や支援方法を選択できるようになることは、自立活動で最も大事である自己理解を土台とした課題解決につながると考える。さらに、視覚障害教育における補助具の活用については、使用できるかどうかだけでなく、本人が納得して選択することが大切である。

生徒の心情の変化は、当初は「できない」「怖い」という否定的な感情が強かったが、教員の説明や体験を通して「試してみたい」という好奇心が出てきて、「楽しい」と感じられるようになった。この心情の変化は、補助具や歩行指導が単なる技能の習得にとどまらず、生活への意欲や自己肯定感の向上へとつながった。

本事例については、学級担任A・C、自立活動委員B、点字担当教員D、寄宿舍指導員E（歩

行訓練士)、視能訓練士 CO が連携し、それぞれの専門性を生かして支援を行ったことが成果を大きく後押しした。特に、視能訓練士の客観的な評価や説明が、生徒本人の理解度を深め、教員の支援にも一貫性を持って、ともに活動に取り組むことができた。さらに、本校では、自立活動担当の教員が中心となって、同じ学部の教員同士で情報共有を図り、共通理解を深めるために年2回情報交換を行っている。こうしたチーム支援のあり方は、個別の困難さに対して多角的に支援を行う上で欠かせないものである。

特定の生徒に限らず、例えば補助具の使用について検討する際に、「なぜ見えにくいのか」を生徒に説明し、納得させることが重要だと考える。また、歩行指導においても安全性を高めるためだけでなく、色やランドマークを活用する経験を通して、生活の楽しみや活動範囲を広げることが可能になる。このような視点は、視覚障害教育全体にも応用できる。

この取り組みは、以下のようなことが大切であったと考える。

- ・眼疾患と見え方について教師や視能訓練士と一緒に整理をする。眼疾患が眼のどこに影響し、どんな見え方なのか、実態に応じた説明をして理解を図る。
- ・生活の中で視覚をどのように活用するのか、すぐに活用できる現在と自立に向けた将来のイメージを持たせる。
- ・整理したことについては、自分の言葉で伝えられるよう、本人に自分の見え方や支援方法について説明する機会を多く持たせる。

5 まとめ

眼の使い方や生徒自身にとって適切な文字の大きさなどについて、教員や視能訓練士と一緒に整理することで、見え方や情報の活用方法を日常生活に積極的に生かしていきたいと生徒自身が思うようになった。

ICT 機器のさらなる活用や、家庭・地域での学びも視野に入れ、スマートフォンやタブレット端末のアプリを活用した食品アレルギー成分表示の確認や、地域での歩行指導を含めた外出での実践などを通して、本人の生活力をさらに高めていきたい。また、高等部以降のキャリア教育とも結びつけ、自らの見え方や支援方法を発信できる力を育成することが課題である。今後も将来の生活のイメージを描き、「どんな自分になっていきたいか」を楽しみながら考えられるように、支援や指導を工夫し、生徒自身が身に付けたい力を自ら選択し、それらの力を確実に積み重ねることで、大きな力となって自信を持って将来へ進んでいくことができるよう、教員がチームを組んで働きかけていきたい。

小学校と現在を比べて（資料用に一部レイアウトを変更）

始めに

〇まとめようと思ったきっかけ

1年前はまだ6年生だということを考えて、
ふと思いだしたから。

弱視学級での自分

- 1 授業について
- 2 環境について
- 3 心について



つらかったこと

1 授業について

・交流学級の授業
（体育、外国語、道徳）

・運動会
伴走



通学路

音響式信号がない。
歩道がない。

2 環境について

学校のルール
右側通行を守らない。
走る、とびだす。

3 心について

他の人と比較して
しまう

我慢してしまう

視覚支援学校にきて変わったこと

1 授業について

- ・プリントの文字のサイズやフォント
- ・体育の内容
- ・自立活動が充実

視覚支援学校にきて変わったこと

2 環境について

- ・学校周辺の充実
- ・必ず右側通行！

視覚支援学校にきて変わったこと

3 心について

- ・みんな同じ立場
- ・相談できる人がたくさんいる

これからについて

- 1 弱視学級の人にいろいろなことを伝えたい。
- 2 一般の人に知ってもらいたい。

まとめ

弱視学級

現在

・学習面や生活面で
困った時があった
けれど、我慢をして
いた。
・同級生といろい
ろな面で比較をして
いた。

・左のようなことがな
くなり、毎日楽しく
過ごしている。

・相談しやすい環境に
なった。